

巻 頭 言

2022年度臨床心理学コース紀要担当教員 滝沢 龍

この度第46集東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要が公開されました。本コース紀要は学生たちが中心となり、執筆・編集の作業が進められ、年に1回の頻度で発行されます。今回も力作が揃いました。

当コースは「臨床心理学」というその名の通り、困り果てて倒れてしまいそうな方々を手助けする（「床に臨む」）ことに関して、「心理学」という学問手法を用いて臨床研究と臨床実践を進めています。そのために研究や実践の進捗を公表することで、議論の場に提示し、現時点の学問の到達点を確認し続ける作業が大切になります。このコース紀要もそうした場の一つと言えます。

哲学の一分野から派生した心理学は、科学の一分野を目指して発展してきました。科学は、ひとりよがりな思い込みや一方的な正当性の主張ではなく、先行研究の到達点を少しでも乗り越えて進むために、建設的な批判も受け入れながら工夫し、再現可能で一般化可能な研究知見をさらに積み上げていきます。

The Royal SocietyとThe British AcademyのFellow達の集まりがロンドンの本部であった際、保管されているニュートン（Sir Isaac Newton）の書簡の実物をいくつか見たことがあります。有名なものの一つに、ニュートンは「If I have seen further it is by standing on the shoulders of Giants.」と書いています。「より遠くまで私が見渡せていたとしたなら、それは巨人たちの肩の上に立ったからです」と、自身の公表してきた研究成果にも確信的な主張をするのではなく、それらが（将来に再現性・一般化可能性が確かめられて）正しいと示されたとしても、それは自分が唯一見出したのではなく「先人達の知恵」に基づいている（巨人たちの肩を借りたからな）のだと柔軟かつ謙虚な姿勢を示しています。

「心の理（ことわり）に関する科学」というハードな側面と、「床に臨む（慈しむ／ケアする）」というソフトな側面の両者をあわせもつ独特な学術領域においては、自分の考えや研究結果が唯一正しいのだと思わずに、こうした柔軟さと謙虚さがより求められるのかもしれませんが。科学性を目指す学問では、建設的な批判精神で吟味される必要もありますから、ぜひ読者の皆様から執筆者への忌憚のないご意見やご指摘もお願いできればと思います。

そして、本コース紀要の執筆者たちや、執筆者以外の所属する皆さんにも、こうした指摘をオープンに受け入れ、柔軟かつ謙虚な姿勢で、今後の学術知見のさらなる発展に貢献していただくことを希望しています。

以上をもちまして、今年度のコース紀要担当教員のご挨拶にかえさせていただきます。